

# 沼津高専1年生の英語学習に対する意識調査報告

村上真理\*

## First year students' Awareness on English Learning at National Institute of Technology, Numazu College

MURAKAMI Mari\*

**Abstract:** The purpose of this paper is to present the results of a questionnaire survey, which was conducted with the aim of revealing how first-year students at NIT, Numazu college felt about English learning. The result is also used to compare first-year students' consciousness toward the necessity to use English after graduating with that of ordinary high school students. It is also examined whether they have been studying English, taking the world into consideration. Their global awareness is compared with that of students enrolled in NIT, Numazu college in 2015, using the result of our survey conducted in 2015. It is expected that the survey data will help set a teaching target and consider better approach.

**Key Words:** motivation to learn English, learning needs, global awareness

### 1. はじめに

令和4年度は全学科の1年生に英語の指導をしてきたが、数年前の学生と比べてある違いを感じてきた。それは、学生は英語の学習に目標を持っているのかということである。どの教科目に関心を抱くかは学生によって異なって当然であるし、また強い関心を持っている教科目はあってほしいものだ。他の教科目に対する学生たちの関心の度合いは知り得ないが、とにかく英語に対する意識に教養科目のひとつだから修めるとする能動的な雰囲気を感じ、英語の学習に目的意識を抱いて授業に臨んでいると感じられない。

具体的に述べると、学生の課題に対する姿勢に「評価の対象だから」あるいは「提出するのだから」行うといった事務的にこなしているような感じを受け、知識を吸収しようという意気込みがあまり感じられない。課題を必ず提出するということが身に着いているという点は評価に値するが、課題を通して英語の知識を深められたり視野が広がられているのだろうかという不安が指導する側に感じられるのである。

定期的に行う英単語テストに対する姿勢にしても、語彙を増やそう、テスト範囲の単語を用いた表現や関連語を知ろうといった積極性がかつての学生よりも感じられない。

日本人学生にいわゆる「内向き志向」が強いと指摘されて

久しいが、本校の学生を見ていると、やはり英語が使えるようになりたいと思って勉強しているのだろうかと思わされ、したがって海外に出ることや外国人と交流することを望み期待しているとは想像できない。

このように思えばどの程度意欲的に英語を勉強しているのか、そもそも意欲を持っているのかを知りたいと思い、一般的な質問を含めた英語に対する意識のアンケートを取ってそれらを把握することとした。

また、英語学習に対する意識を把握するだけでなく、アンケートの結果を用いて将来の英語の必要性に対する意識も考察している。

### 2. アンケートの概要

回答したのは192名の1年生で、質問項目は次の6つである。

- ①歌や雑誌などを含めて英語が好きかどうか
- ②英語が分かる・できるようになりたいかどうか
- ③卒業後に英語が自分にとって必要になると感じているかどうか
- ④他の教科目よりも学ぶ必要性を感じ、積極的に復習をするなどの取り組みをしているかあるいは他教科目と同じ程度であるか
- ⑤自分自身が持つ英語を学ぶ目的は何であるか

---

\*教養科 Division of Liberal Arts

⑥英語ができるようになったらどういったことをしたいか  
 そして⑤までの質問には選択肢を設け、該当する 1 つを選ぶこととし、⑥では 9 つの選択肢を用意して 2 つを選ぶようにしている。

### 3. アンケート結果と示唆されること

質問項目の結果とそれらから受ける様子は次のとおりである。なお、以下に示す各質問項目の名称は必要に応じてアンケートで用いた質問の文言を要約したものとしている。

#### 3.1 項目①英語が好きかどうか

これについては「好き」が 21%、「どちらかといえば好き」が 38%、「どちらでもない」が 22%、「どちらかといえば嫌い」が 15%、「嫌い」が 4%であった。この結果から概ね英語を学ぶことに抵抗はないと考えられる。

また「嫌い」と回答した学生は 8 名であったのだが、それではその学生たちは英語を分かる・できるようになりたいと思っているのであろうか。この質問に 5 名が「強く思う」、2 名が「思う」、1 名が「あまり思わない」と回答している。つまり 7 名の学生が嫌いだと感じながらもできるようになりたいと思っていて、学習意欲をなくすまでに至っていないとの安堵を覚えると同時に取り組み方の改善などで好きになる可能性が期待できそうである。

#### 3.2 項目②英語が分かる・できるようになりたいか

こちらについては「強く思う」が 43%、「思う」が 54%、「あまり思わない」が 5%となり、「全く思わない」を選択した学生はいなかった。この結果からほぼ全体が学習に前向きであると想像できる。

#### 3.3 項目③卒業後の英語の必要性

卒業後に英語が自分にとって必要になると感じているかについては「強く思う」が 46%、「思う」が 48%、「あまり思わない」が 6%となり、「全く思わない」を選択した学生はいなかった。この結果からほとんどの学生が英語知識の獲得は必須であるととらえていると思われる。

#### 3.4 項目④英語学習の必要性和取り組み姿勢

英語学習の取り組みの度合いについては「他の教科よりも学ぶ必要性を感じて取り組んでいる」が 21%、「他の教科目と同じように取り組んでいる」が 79%であった。

前項目③の結果からは英語の習得を重要視しているように思われたが、取り組みにその意識が反映されていないように思われる。さらには英語に関わらず、特に高い関心を持って

授業に臨む教科目があるのだろうかという疑問と、勉強は与えられた課題を消化すれば十分であるといった受身的な傾向にあるのではないかとこの憂いが生じた。

### 3.5 項目⑤英語を学ぶ目的

こちらについては、割合が高いものから順に示すと「日本国内であっても働く時に必要な力や知識になると思うから」が 35%、「英語が分かり使えるようになりたいから」が 34%、「必修科目だから（単位を取りたいから）」が 24%、「外国で働くために必要だと思うから」が 4%、「留学したいから」が 3%であった。

この結果には、英語力は持ち合わせるべき能力だとおおむね思っているであろうと想像される。しかし学習動機を持っていなさそうな学生も少なくないと言えそうであり、この点は項目②と③の結果からは想像していなかったことである。

### 3.6 項目⑥今後の英語能力の運用方面

英語ができるようになったら行いたいことについては「仕事に活かしたい」が 64%、「洋画を字幕なしで観たり英語の本や新聞を読みたい」が 42%、「英検などの資格試験を受験したい」が 35%、「異文化交流をしたい、異文化を学びたい」が 20%、「海外に移住したい」が 16%、「留学したい」が 10%、「世界で活躍したい」が 4%、「国際協力や海外ボランティアをしたい」が 3%、「日本を紹介したい、紹介する資格を取りたい」が 1%であった。なお、2 つ回答を選ぶこの設問には回答がひとつの学生が 9 名いる。

この結果には英語力を武器に海外に出ていこうとする発想はないことが想像され、やはり内向き傾向が依然続いていると感じる。

しかし、最近の若者が英語力を発揮する場面が変わってきているということはないだろうか。そこから英語力が必須とされる最近の社会活動等の有無あるいは状況を我々も知ることとも必要であろう。

## 4. アンケート結果の活用

英語学習に対する意識を把握することに加えて、学生の持つ意識の 2 点について、本校で過去に実施した調査とベネッセ教育総合研究所が高校生対象に実施している調査を用いて、意識の比較を試みることにした。

比較する 1 つ目の点は海外で働くことに対する意識である。本調査の質問項目⑤である英語を学ぶ目的に対する回答の選択肢に「外国で働くために必要である」を入れている。英語科では 2015 年に 5 学科全ての学生を対象にグローバル意識調査を実施し、そこにおいて海外で働くことに対する意識調

査を行っている。この点において当時の学生の意識との違いを見ている。

2つ目の点は将来の英語の必要性についてである。ベネッセ教育総合研究所が2020年に「高1生の英語学習に関する調査」の結果を報告している。その調査項目の将来の英語の必要性に関する部分について、普通高校の生徒と高専生の意識に差異があるのかを見ている。

#### 4.1 グローバル意識調査結果との比較

先に述べた2015年に実施したグローバル意識調査であるが、これは産業能率大学の実施するグローバル意識調査を用いて本校の全学科の学生すべてを対象に実施したものである。今回のアンケート調査と趣旨は異なるが、英語を学ぶ動機の違いが映し出されると思われるので取り上げた。具体的にはその調査項目の中にある就職後に海外で働くことに対する意識の部分である。

今回の調査対象が1年生であるので、2015年のグローバル調査の回答も1年生196名のもを見ていくと、9%の学生が「就職後にどんな国・地域であっても働きたい」を、53%が「国・地域によっては働きたい」を選択していることから、62%が海外で働くことを考えていたことが分かる。なお、望む理由には62%の学生が「日本ではできない経験を積みたいから」を、60%が「自分自身の視野を広げたいから」を、32%が「語学力を高めたい」を、12%が「外国人と働きたい」を選び、12%の学生が「その他」となっている。

では現在はどうかという、質問項目⑤の英語を学ぶ目的に対する回答の選択肢である「外国で働くために必要だと思うから」を選択した学生、つまり外国で働くことが視野にある学生は全体の4%である。現在は世界情勢が非常に不安定であるから外国で働くことに夢や希望を持つことが出来ないことは容易に想像されるが、質問項目⑥の今後の英語能力の運用方面に対する回答に「国際協力や海外ボランティアをした」を選択した学生も3%であることから、英語運用能力に自信をつけて海外に出ていこうという意欲やそういった方面に関心をあまり抱いていないことが分かる。

#### 4.2 「高1生の英語学習に関する調査」との比較

ベネッセ教育総合研究所は971名を対象に「高1生の英語学習に関する調査」を行っている。詳細を見ると「あなたが大人になったとき①社会ではどれくらい英語を使う必要がある世の中になっていると思いますか。また、②あなた自身はどれくらい英語を使っていると思いますか」という質問に対して、自分自身が英語を使うイメージに対して「英語を使うことがほとんどない」が42.9%、「日常生活で外国人と英語を話すことがある」が25.2%、「いつもではないが仕事で英語

を使うことがある」が25.6%、「仕事ではほとんど英語を使う」が5.4%というものである。結果の概要部分にも「高1生は英語の必要性を感じているものの、将来、自分自身が使うイメージは低い。約9割が、大人になったとき、社会で英語の必要性を感じている一方で、自分自身の英語使用をたずねると、約4割が「英語を使うことはほとんどない」と回答している」とある。

さて、ここで注目した点は頻度を考慮せずとも仕事で英語を使うことを想定している高1生はおよそ31%であるという点である。本調査での英語を学ぶ目的の回答の選択肢の「日本国内であっても働く時に必要な力や知識になると思うから」を選んだ割合は35%である。質問方法は異なれども、両アンケートに見る英語を学ぶ先に想像しているものの結果を照らし合わせると、将来の英語の関りに対する高専1年生が持つ意識は一般的であると言えそうである。

#### 5. おわりに

アンケートから見えたことをまとめると、学生は概ね英語を学ぶことに抵抗はなく、また卒業後の私生活を想像して、ほとんどの学生が英語の習得は必要であると考えているようであり、できるようになりたいという意欲が高く学習に前向きであるようだ。

しかし目的を持って英語の学習をしているのではなく、英語はこの年齢で持ち合わせるべき知識だという程度に捉えているようで、そこからはできるようになりたいという高い意識はどういった理由によるものか、またその程度は明確に把握できない。そして学習動機を持っていなさそうな学生もやはり少なくないようである。

また気になっていた、学生が持つ教養科目の中での英語の位置づけは、やはり等しく学ぶ教科目のひとつであるとの認識であるようだ。

今回の調査は、新入生の全体像を明確にすることで、学生の背景とニーズに対応する英語教育の実践方法の点検のような作業を試みたものである。本結果を参考にして学生の入学時の意欲と感心を維持する英語教育の展開に具体的な議論が持たれることを期待する。

## 参考文献

- [1] 藤井数馬、村上真理: 沼津高専本科生のグローバル意識調査報告, 沼津工業高等専門学校研究報告, 49 (2015), pp.81-86
- [2] (株) ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所: 「高 1 生の英語学習に関する調査」〈2015-2019 継続調査〉(2020), p.14